

1-1					
主題	ご本人らしさを追求し、言動の意味を考えた取り組みにおける BPSD の緩和				
副題	キラリホット(※1)なあなたを応援します				
キーワード 1	認知症	キーワード 2	BPSD	研究(実践)期間	17ヶ月

法人名・事業所名	社福) 浴風会 第三南陽園 (介護老人福祉施設)
発表者 (職種)	山内美千代 (介護職員)、寺川直哉 (介護職員)
共同研究(実践)者	宮岡学文 (フロアリーダー)、金丸勇太 (介護職員)、丸井貴博 (介護職員)

電話	03-3334-2193	FAX	03-3334-2198
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	杉並区の京王井の頭線高井戸駅から徒歩 10 分程度の所に位置し、住宅街にありながらも、沢山の緑に囲まれています。平成 14 年に開設し、地上 6 階、地下 1 階、定員 222 名の方が生活されています。『もうひとつの我が家』と思っていただけるように、ご家族も含めて信頼しあえる関係が結べるよう努めております。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

ご利用者 A 様 男性 70 歳 要介護度 3、長年編集の仕事で輝かしく活躍。自宅生活では編集の仕事柄、字を書くことや、好きな物のコレクションなど趣味が多く、活動的な生活をされていた。66 歳の頃から自宅に帰れないなどの行動がみられ、同年にアルツハイマー型認知症と診断された。その後、68 歳で当施設に入所となった。

入所後の生活は、お部屋にこもる事が多く、夕方になると帰宅願望が強くなり、着ている上着やズボンの中に荷物を詰め込み、荷物用エレベーターのボタンを激しく押すことを繰り返す行動がみられていた。また、フロアの物品を収集し、タンスに詰め込むことを繰り返され、職員が声をかけて回収しようとするとうるさい。」と拳を握り、威圧的な言動や行動をとられていた。また、他のご利用者ともトラブルになることもあり、他のご利用者や職員との関わりを嫌うことがみられた。その様な現状を踏まえフロアでは話し合いを行い、A 様に居心地よく、穏やかに過ごして頂くにはどうしたら良いかを検討した結果、「①居住空間の整備をすること」「②少しでもやりがいのもてるような役割を持って頂くこと」この 2 点を重点にアプローチをしていくこととした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

上記 2 点のアプローチを通し、職員間で共通した認識を持って関わることで、施設生活におけるの楽しみや役割を見つけていき、自発的にやろうとする気持ちを引き出すことを目指し、その結果 BPSD の緩和に繋げることができればと考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① ご家族と相談・協力をお願いして、ご自宅にある好きな雑誌や置物、物品類を居室に用意し、自宅に似た環境に整える。取り組み後、帰宅への欲求による行動、エレベーターのボタン押下頻度を集計、グラフ化し、職員で話し合いを持つ。
- ② テラスの整備、植物のお世話をお願いし、ご本人と積極的にコミュニケーションをとることで、他のご利用者や職員との関わりを増やす。
- ③ 食事メニューをホワイトボードに書いて頂き、役割や職員との関わりを持つことでご本人の言

動に変化があるかを観察する。取り組み後、リビングで過ごされる時間を集計、グラフ化、職員アンケートを行い、ご本人の言動の変化を調査。

《4. 取り組みの結果》

- ① データの集計とグラフ化、職員アンケートからご本人の言動や行動の変化について確認を行った。「帰りたい」と話されることやエレベーターのボタンを押す回数が約45%減り、フロアの雑誌や共有物の持ち帰りも減った。
- ② 自分の仕事として認識し、自発的にお手伝いをされるが増え、リビングで過ごされる時間が約53%増えた。
- ③ 他ご利用者に笑顔で挨拶をされる、席を譲られるなどの気遣いがみられるようになり、威圧的な言動、行動はほとんどみられなくなった。職員への握手やボディタッチなどのスキンシップが増え、関わりが多くなった。

《5. 考察、まとめ》

「ご本人が望む生活」、「ご本人らしさ」を追求しアプローチを継続していくことで、信頼関係の構築に繋がり、その結果「他のご利用者や職員と関わりたい」という気持ちを引き出せたと考え。ご利用者の言動の意味を考え、肯定的な言葉で接することで、「自分のことを分かってもらえている」という気持ちの変化が現れ、同時に職員への信頼の気持ちも高まることを実感した。

認知症のご利用者のケアとして必要なことは、「ご利用者が輝く」対応を考えていくことを基本として、職員間の情報の共有、アプローチを継続して行っていくことが大切である。

更なる課題として、他のご利用者に対しても「ご本人が望むこと、したいこと」を第一に考え、認知症の状況に合わせたアプローチを続けていきたい。楽しみがあり、過ごしやすい安心して生活して頂けるようにケアマネジメントを行い、沢山のキラリホットな日常を応援できるようにチャレンジしていく。

そして現在、フロアでは継続した取り組みとして、女性ご利用者B様の施設生活における課題に取り組んでいる。施設での生活は「つまらない。」と不満を話され、笑顔が少なく、日頃関わりのないご利用者に対してもお金のことで強い不信感を持ち「いい加減にしろ。」と興奮されたご様子で詰め寄り、トラブルになることがある。また、ケアステーションの扉を激しく叩き、他のご利用者に対しての不信感を職員に繰り返し話されることがある。上記のような生活の問題を抱えているB様であるが、時折、職員や他のご利用者に「花屋をやりたい。」と話されることがあり、園芸活動を中心としたアプローチを継続して行うことで、日々のやりがいや関わりからB様のBPSDに変化があるのかを調査していくこととした。途中経過ではあるが、園芸活動を通じて、他のご利用者とは笑顔で接するB様のキラリホットな一面がみられたり、職員に「やることあるでしょ。行こう。」と自発的な行動がみられたりするようになってきている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

介護サービスと割れ窓理論とカンフォータブル・ケア～言葉をただすことがリスクマネジメントの基本～「介護の誇り」菊池 雅洋 2017. 日総研

サービスマナーの実践は専門的行為である (masaの介護情報裏版 2016.3.17)

(※1)第三南陽園でキラリホットとは、その人が生活の中でキラリと輝く、ほっとする場面に関わりの中で見つけ出し、それを応援することである。それは同時に職員も輝くことにつながる。

《8. 提案と発信》

本研究発表の主題にある「ご本人らしさの追及」。その根幹は、ご本人に寄り添い、関わりを続けることにある。継続したアプローチを行うことは、どの施設、どの職員でも実践可能なこと。関わりの積み重ねが、ご利用者のより良い生活に繋がるのだと感じることが出来た。